

三浦綾子・三浦光世

太陽はいつも雲の上に

太陽はいつも雲の上に

主婦の友社の評判雑誌****	
結婚したら	主婦の友 毎月17日発売
結婚と愛を見つける雑誌	ai 毎月7日発売
ママとパパの雑誌 わたしの	赤ちゃん 毎月15日発売
赤ちゃん・子どもの 手作りファッション誌	別冊主婦の友
主婦の友・生活シリーズ	
主婦の友・園芸ガイド	

〈検印廃止〉

太陽はいつも雲の上に

発行／昭和四十九年十一月五日

著者／三浦綾子
三浦光世

発行者／石川数雄

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六
郵便番号 一〇一

振替 東京一八〇番

電話 東京(03)二九四 一一一一(大代表)

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店が本社へお申しいでください。

印刷 星野精版印刷株式会社
(オフセット) 凸版印刷株式会社

前がき

三浦綾子

あれは、わたしが小学校二年生か三年生の時であったと思う。母に命ぜられて、わたしは近所の店に、味噌を買いに行った。

店の女主人と、若い女の客とが、何か話し合っていた。と、その女主人は、

「論より証拠、ま、この佃煮の味見をして見てください」

といい、箸で何かの佃煮を客にさし出した。客は手のひらにそれを受けて口に入れ、

「あら、本当においしいわ」

といった。

この時、幼い小学生のわたしにも、

「論より証拠」

という言葉が、スカッとわかった。なるほど、いろはがるたにある「論より証拠」というのは、こういうことであつたかと、わたしは納得したのだ。

それ以来、わたしは、こうした「ことわざ」「警句」に類する短い言葉に関心を抱くようになった。

教室の壁に掲げてあった、

「涙と汗は人のために流せ」

という言葉に惹かれたのも、小学生の頃である。

長じて、わたしの虚をついたのは、

「孤独が恐ろしかったら、結婚するな」

というチェホフの言葉であった。

そして、やがてキリスト教の信仰を持ち、わたしは聖書の中に、実に数多くの宝石のような言葉を見出した。

「与うるは受くるより幸いなり」

「自分にしてほしいと思うことを人にもして上げなさい」

などという言葉を、わたしはカードに書いて一生懸命憶えたものだ。

わたしは長い療養中、耐え難い苦しみや淋しさにあったこともあるが、そうした中で、ふっと胸に浮かぶその時その時の言葉が、どんなにわたしの力となり慰めとなったことであろう。

わたしの友人太田邦雄兄は、婚約者に、「何も物を持って来なくてもよい。ただ、聖言みことばをたくさん胸にたくわえておいで」

といったという。このことは、わたしの随筆集「愛すること信ずること」の中で述べたが、わたしの感銘する言葉であった。

世に、名句、警句、金言、格言、ことわざといわれる短い言葉はたくさんある。それらに

は、先人の深い知恵、人生への鋭い洞察から生まれた思想が凝縮されてあって、強い説得力を持って迫るものが多い。

迷い多く、悩み多い人生で、これらの言葉が、思いがけない支えとなってくれることは数え切れない。たくさん言葉を知っていることは、数多くの教師や友人を持つているのに似ている。

そう信ずるわたしたち夫婦は、自分の好きな言葉、心ひかれる金言を、ここに紹介したいと思ひ立った。無論、あまりにも有名で、既に人々の知っている言葉も少なくない。が、ここには無名の人の言葉もあるし、三才の幼児の言葉もある。有名無名を問わず、感銘した言葉を入れた。オコがましくも、自分の言葉や、歌さえ入っている。誰からともなく聞き知って、出どころのわからぬものもある。

こうした「警句」「格言」は、人それぞれによって、広くも狭くも、浅くも深くも感じられるにちがいない。また、その時々によって、強くも弱くもひびくにちがいない。この書には、わたしたち夫婦が感じたことを述べてあるが、その感じ方はわたしたちのものであって、読者はまた、おのずからちがった考え方をされるかも知れない。

いずれにしても、これらの諺の類が、一人一人の胸の中で、何らかの励ましとなり、慰めとなるならば、幸いである。

なお、紹介したこれらの言葉の中には、本によって、多少のちがいがああり、一つの言葉に、幾通りもの言い方があって、どれが正しいかは、わからないものもあった。また、外国の言葉

は、訳者によってもちがう。言葉だけでなく、人名なども人によって訳しかたがちがうので、あるいは気になる点があるかも知れない。

聖書の言葉も同様である。あまりに長い言葉は、わざとちぢめた。順序を変えて調子をととのえたものもある。

その他、外国人の名前には、括弧^{かっこ}を付して、国籍、職業を略記することにつとめたが、如何なる人物か不明のものもあって、それらは人名だけになっている。

パラエティも考えて、わたしと三浦は傾向のちがう言葉を^{えら}びんだ。三浦のは一般に知られたものが比較的多く、わたしのは、歴史上の人物の長い言葉が多い。聖書からの引用は、特に三浦のほうが多くなっている。

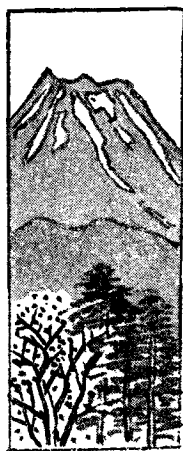
この書を出すに当って、ご尽力下さった主婦の友社出版局のかたがたに厚く御礼を申しあげたい。なお、ご多忙のところ、装幀の労をお引受け下さった小浜亀角先生にも深く感謝申しあげる次第である。

目次

前がき	1
一、山の章	9
二、川の章	60
三、野の章	110
四、海の章	160
五、空の章	211

太陽はいつも雲の上に

山の章



男子厨房に容喙せず ことわざ

十余年前、結婚して間もない女子事務員が、
「彼、ナベのふたをとってみたい、ご飯の残っているのを注意したり、うるさいったらありやしない」

と、ぼやいているのを聞いて、何だか自分がいわれているような気がしたことがあった。今はそうでもなくなったが、厨房のことにとにかくくちばしをいれることでは、私も人後に落ちないほうである。省みて、確かにいいさまではない。

しかし、煮ては余し、焼いては余し、余しては捨てる。これが私には心配でならないのだ。食物を無駄にしたら目がつぶれると、アメリカあたりでもいっているそうだ。

開拓農家に育ち、米の飯は盆と正月と葬式の時ぐらいしか食えなかった経験を持ち、敗戦後、米の飯を銀めしといった時代を経て来た私などには、この一点では厨房に容喙せずにはいられない。宴会での残り物など、今も心配の種である。

世界の三分の一は現に食糧不足に悩んでいるときく。日本もいつ米の飯が食えなくなるか、わかったものではない。

(光世)

足の無い人を見るまでは、靴の無いのをこぼしていたものだ

全く、わたしたちの毎日は、つぶやきに満ちている。雨ふりが二、三日つづけば、うっとろしいといい、晴天が続けば、こんなカラカラ天気はかなわないという。

夫のものの言い方がどうの、妻の料理がどうの、父親はわからずやだの、母親はもの知らずだの、上役は横暴だの、同僚の誰それはなまずるいだの、いや給料がやすいだの、つき合いに金がかかるだの、何かしら、ぶつぶつ文句を言っていることが多い。

わたしたちは、何の感謝すべきことも、喜ぶべきこともないように思っているのではないか。

両足もある。両手もある。目は不自由でも耳がきこえる。鼻は少々低くても口もとが愛らしい。背は小さいが、体は丈夫だ。あまり金持じゃないが、人には好かれる。結構喜ぶべきこと

があるのに、愚痴が多い。そんなわたしたちの胸をこの言葉は鋭く刺し通す。

(綾子)

生兵法はケガのもと ことわざ

数年前に亡くなられたが、八代斌助ひんすけという牧師がおられた。たいそう豪放な先生で、清濁併せのむ人物といわれた。

ある時、この先生が青年たちに質問した。「朝、働きに出る前に、人は何をなすべきか、君たちわかっているか」

青年たちは、お祈りとか、聖書朗読とか、大まじめに答えた。

「そんなものじゃない。クソだ。クソをたれることだ」

先生はそういって便所に行ったとか。

私はその話をまた聞きして、余りうれしくなかった。それこそクソまじめな頃だったからである。

その後、ある者はこの先生のドライな面だけに傾倒し、二階の窓から小便するまでになった。幸い二階から叩きおちてケガをすることもなかったが、生兵法の類であったことは確かである。

何事によらず真意を正しく学びとるのは、むずかしいものだ。

(光世)

何を笑うかによつて、その人の人柄がわかる

マルセル・パニョール（劇作家・フランス）

何を笑うかということは、何に満足するか何を快しとするかということだろうか。それとも何を嗤うかということだろうか。わたしは後者の「嗤う」と解釈して筆を進めてみたい。

人が転んだのを見て笑う。容易な算数が解けない人を見て笑う。倒産した人を見て笑う。というように、わたしたちは、人の失敗を見て笑うことはないだろうか。

それがもし、自分の身に起きたことなら、転んでしたたか腰を打っては笑えまいし、数学の問題に苦しみつつも笑えまい。ましてや倒産して笑うことなど、出来るものではない。

自分自身の身に起きたことなら嗤えぬことを、他人事だから嗤うという冷たさは、決して許されることではあるまい。嗤うべきは、他人の失敗や不幸を見て嗤うおのれ自身の姿ではないだろうか。

人を嗤った時、その時の自分こそ嗤われる人間なのだ。わたしたちは何を嗤うべきかを知らねばならぬ。

（綾子）

あなたの荷を主（神）に委ねよ

旧約聖書 詩篇 55 の22

一頃、「マカシトキ」という言葉がはやった。流行語には俗悪なものや、無意味なものも多いが、これなどはいいいほうだ。

人間は誰しも自分の限界以上の荷を負うことはできない。が、それを無理に背負いこんで、必要以上に苦しんでいることが多い。そんな吾々人間に、神は「わたしにまかせてみないか」と呼びかけておられるのである。しかもこの言葉は、カラネンブツではない。神が責任をもつて、いつておられるのである。キリストもまたいわれた。「重荷を負うて苦しんでいる人は私においでなさい。休ませてあげよう」と。

相手が人間であれば、いくら「マカシトキ」と大見得を切られても、どうしてもまかせられない時もあるし、信ずるに価しない相手である時もある。まかせるといふ以上、信じ得る相手でなければならぬ。

真の神は明らかに信ずるに足る存在なのである。

(光世)

人間威張ろうと思えば粥を食わぬことさえも威張れる

本の名は忘れたが、女学生の頃読んだ随筆に、

「俺は、腹をこわしても、決して粥なんか食いはしねえ」

と、粥を食べぬことを、さも偉そうに言う男がいる。人間威張ろうと思えば、粥を食わぬこ

とさえ威張れるものだ、と書いてあったのを記憶している。

「ぼくは、中学時代、一度だって掃除当番をしたことはありませんよ。一度だってね」

と胸を張って威張っていた人がいた。

「家へまっすぐ帰ったことなんてありませんよ、自慢じゃないが」

と自慢していた人がいた。

全くの話、わたしたちは、威張ろうと思えば、くだらぬことでも威張る材料にするものだ。ましてや、少々、人さまからはめられる才があり、能力がある人は、ついつい自慢話をしてしまうという愚かさに陥りやすいのは、致し方のないことかも知れない。

（綾子）

迷う者は道を問わず 荀子

ある地方で、初めての場所を訪ねるためにタクシーに乗った。大体の行先を告げ、途中で誰かに聞いてくれるように運転手さんに頼んだ。ある家で聞いたところ、六キロも過ぎている。素直な運転手さんで、途中で人に聞かなかったことを、しきりに詫びてくれた。

そもそもは、こちらが悪いのである。目ざす地点をもっと正確に知っておくべきであった。地図でも書いてもらっておき、それを見せるべきであった。道順というのは、言葉だけではなかなかわかりにくいものである。うろおぼえてタクシーに乗り、運転手にあちこち探させるよ